

2019
秀作

第17回「金融と経済を考える」高校生小論文コンクール

お金ではかれないものの価値

神奈川県・神奈川県立平塚中等教育学校 5年 中富 千晴

毎年夏になると熱く盛り上がる兵庫県の甲子園球場。その近くにある食堂の名物は、「カツ丼大」だった。「小遣いで食べに来る高校球児も気軽に来られて、満腹になれるように」とつくられたが、近年になって「大」を頼んでも半分以上残して帰る人が増えた。店長は悩んだ末、長年続けてきた「大」の提供を今年からやめる、苦渋の決断をしたという¹⁾。このニュースを見たとき、私は悲しくなった。ポリューミーで「映える」写真を撮って、SNSにあげて、料理はまともに食べもせずに帰る。そんな様子を、店の人はどんな気持ちで見てきたのだろう。お金がもったいない。材料がもったいない。もちろんそれもある。けれどその前に、考えなければならないことがあるのではないだろうか。

「客のお金で買ったのだから、どうしようと客の勝手だ。」そういう意見もあるかもしれない。わたしたちは普段、いろいろなモノやサービスの価値を「お金」によってはかり、その価値に合った代金を払うことでそれらを手に入れている。だから「お金」という数値化された価値と引き換えにその人のものになるという考えは、間違いではないだろう。しかし、わたしたちは人間であり、ロボットではない。お金とモノの価値は、必ずしも等しくはならない。「カツ丼大」は、決して価値が低いから安い値段で売られていたわけではなく、店長の思いやりがあり、優しさがあり、ころがあるのだ。客と定食屋との取引の間には、お金だけではない価値がたしかに存在している。けれど、わたしたちはなにかの価値を考えると、「お金」に頼りすぎている気がする。

去年の冬、初めて自分から希望し、ボランティアを体験した。地元で行われるマラソン大会で、何種類かの給水の準備をし、走る選手に渡す仕事だ。凍えるような寒さの中、何時間も立ちっぱなしで休むことなく水を汲んでは、途切れることのないランナーの列に渡し続ける。想像していたよりもはるかに辛かった。それでも、ランナーの姿や他のボランティアの方に、応援する側である自

分が励まされた。この活動はあくまでボランティアであるため、賃金が払われることはない。けれど、人とつながるあたたかさを感じ、裏方でなにかを支える仕事の苦勞を知り、その大切さを学ぶことができた。これは、お金にかえることも、お金ではかることもできない。私にとって、活動を通して得た経験のひとつひとつが、お金よりもはるかに価値のあるものなのだ。世の中にあふれるさまざまなモノは、お金で価値が決められているように見える。けれど、そもそもモノの価値は人によって違う。その時、その場所、その状態によっても違う。わたしたちはそれを「お金」という一つの共通したものさしではかっているに過ぎないのだ。

私は普段、飲食店に行くときに心掛けていることがある。それは、料理を残さないことだ。いつも料理を残さない人にとってはきっと、当たり前のことだろう。けれど、それができていない人がいるのも現状である。写真の「映え」を狙って店を訪れ、頼んだ料理をほとんど、あるいはまったく食べずに帰る人がいることは、最近になって問題視されている。実際に、冒頭で紹介した定食屋が「カツ丼大」をやめた大きな理由の一つだ。時代の変化に伴って生じたこの問題に、頭を悩ます店はきっと少なくないだろう。かれらは、料理を「食べること」としてではなく、「撮った写真をSNSにあげること」として価値を見出している。もちろん、そんなことをお店は望んではいない。料理は食べるものだ。それを捨てることは、食べ物としての価値を無駄にしてしまう。味わってもらうために料理を一生懸命作った人やそれを運んだ店員の努力も。お金をもらっても、食べてもらわなければ意味がない。喜ぶはずがない。だから料理を残さないようにするというのは、消費者として持つべき最低限の意識なのである。目に見えないものの価値を、無視してはいけない。

昔とは異なり、わたしたちのまわりは、モノやお金であふれている。お金はモノやサービスの価値を数値化し、目で見ることを可能にする、大変便利で必要な基準だ。国や地域で共通した「お金」があるからこそ、世の中がスムーズに動いている。けれど、お金は一つのものさしであることも、忘れてはならない。思いやり、感謝、命、努力、時間……。気がついていないだけで、お金で買えるものよりも、買えないものの方が実は多いのかもしれない。「お金」では価値をはかることができないものに、わたしたちはもっと目を向けるべきだ。お金

との向き合い方、いろいろな価値について、一生を通じて考え続けていきたい。
そして、お金以上の価値のある経験をしていきたいと思う。

(注)

- 1) YAHOO!JAPAN ニュース 8月17日配信「球児のために作った『大盛りカツ丼』 甲子園の老舗食堂がやめた悲しい理由」

